

夏にチームに入会し、その練習風景をいつも湖岸で眺めていたという。週末には各地で開かれる大会にも、兄を追ってついでにいった。そんなお兄ちゃん子の朱澄さんが、同じスポーツをやりたいと考え、カヌー競技の世界に飛び込んだのは、ごく自然な成り行きだったのかもしれない。

チームに入会した子どもたちは、まずはカヌーに慣れるため、B&G海洋センターのプールを使った実践トレーニングから始めた。それと平行して、階段を使ったダッシュや体育館での筋力トレーニングにも励み、カヌー技術と基礎体力向上を図った。

朱澄さんは当時を振り返る。「あの頃はとにかく練習が楽しかったですね。トレーニングをトレーニングとも思っていない。一度も苦しいとは思いませんでした。お兄ちゃんたちがバドルをこご姿を見ていましたからカヌーに抵抗もなかったし、わりとすんなり慣れることができた気がします。でも負けず嫌いな性格でしたから、上級生や高校生に混じっての練習であっても、負けると悔しかったですね」と苦笑いした。

チームの練習は、ほぼ毎日学校が終わってから父兄の送迎で練習場に通った。水上での練習は、毎回だいたい1、2時間。辺りが暗くなるまで続けられた。陸に上がったあとは、艇庫の明かりを頼りに筋トレなどに励んだ。

勝つ喜び、負けるくやみやん
夢はいつしか目標へと

小3で初の全国大会にエントリー。4年生の同大会では各県の上級生を抑え3位に入賞するという快挙を果たした。

その後、5、6年生と続けて同大会にエントリーするも、いずれも2位に終わり、勝つ喜びを味わうとともに、負ける悔しさもかみしめた。

表彰台の真ん中に立つ選手が誇らしげに笑う姿をながめるうちに、「いつか自分もあの場所に立ちたい」という願望が芽生えたという。

「あるときオリンピックの種目にカヌー競技があることを知り、いつかその表彰台に立ちたいと思うようになっていきました。でも当時、私は小学生。口にするのは恥ずかしくて、周りの人たちには『オリンピックのカヌーを、この目で見てみたい』と話していた『目標』というより、漠然とした『夢』といった方がしっくりいくかもしれません。いつか行けたらいいなあ……くらいのぼんやりしたものでした」。

そんなおぼろげな夢だった「オリンピック」への思い。「オリンピック」への思い。朱澄さんの中で、現実味を帯びた「目標」へと変わった。きっかけは、高校3年生の時に経験した「シニア日本代表」の強化合宿だった……。

小2で飛び込んだカヌー競技の世界 きついはずの練習も楽しかった



高校時代に出場したジュニア大会での朱澄さん。絶対的な強さを誇り、国内に敵無しと言われた。

オリンピック出場という おぼろげな夢

「国体を誘致しよう。静岡県内でカヌーをやるなら、この町しかない」。平成6年のこと。平成15年開催予定のNEW!!わかふじ国体（第58回国民体育大会・以下わかふじ国体）のカヌー競技会場として名乗りを上げた川根本町（旧本川根町）。まちを挙げての誘致が始まった。レジャーとして「川下り」が盛んだった当時、長島ダム completionを平成14年に控え、大会を開催できる見通しがあつた。競技場の整備やリハーサル大会の開催、人件費、備品購入まで含めて約14億円（うち県補助金が約10億円）を投入する一大プロジェクトだった。

このわかふじ国体の誘致に関連して、地元出場選手を育てようという目的で平成7年に結成されたのが「本川根カヌーレーシングチーム（以下チーム）」だ。国体の開催を見据え、当時の小学生約10人が入会。練習をスタートさせた。朱澄さんがチームに入会したのは小2の冬。2人の兄が

カヌー競技は主にこの3種目に分類される

●フラットウォーターレーシング

流れのない川、ダム、湖、湾などを利用し、一定の距離と水路（レーン）を決めて着順を競う。こぎ方が異なるカヤックとカナディアンがある。朱澄さんはこの競技。



●スラロームレーシング

カヌーを使った回転競技で、変化に富んだ流れのある川で実施される。こぎ下りとこぎ上がり区間をポールに触れないように通過し、そのスピードを競う。



●ワイルドウォーターレーシング

流れの激しい川を一気にこいで下る競技で、順位は所要タイムのみ決定される。競技は、ノンストップトレーニングに続き、1回のみで競われる。



follow the track

軌跡

日本を代表するトップアスリート「大村朱澄」
彼女がカヌー競技を始めたきっかけは
ここまで歩んできた道のりは
その軌跡をたどる